

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 315



1998 FEBRUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1998年H A J 登山隊員募集

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1998年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

海子山 (5,000m級)

四川省西部、理塘の南にある稻城県の名所、海子山にて5,000m峰の登山とトレッキングを楽しむ

みます。311号で紹介したように、古寺と湖沼の多い知られざる地域です。隊長は酒井國光さんの予定です。

記

1. 期 間:1998年8月1日～21日(21日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

未踏峰 (カバン 6,717m)

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1998年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負 担 金:95万円

表紙写真

ウットラカンド四大聖地の一つであるバドリナートは巡礼の人々で相変わらず賑わっている。ロードヘッドのマナからサラスワティ川と分かれ、真のアラクナンダ川に沿って進む。サトパント氷河のモレーンを数ヶ所越え、小雪の降る中キャンプ地マジナに着いた。

翌朝、モレーンの丘に登り、待望のニルカンタ (6,596m) 北壁と対面することができた。
(記: 松山 昭)

ヒマラヤ No.315

- | | |
|--|-------|
| 1. 日本ヒマラヤ協会の30年 | 稲田 定重 |
| 12. H A J 年別山別入山集計表 | |
| 15. 1997年パキスタン登山結果 | |
| 18. 日本隊ヒマラヤ登山1997年 | |
| 21. ヒマラヤ・ニュース 〈地域ニュース・インフォメーション・トピックス〉 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

日本ヒマラヤ協会の30年

理事長 稲田 定重

草 創

手元に小さな「ヒマラヤ通信」がある。第1号の巻頭は、柴田金之助会長の「協会の意図するもの」で飾られている。「私は登山家ではありませんが、1963年にヒマラヤを訪れて以来、その美しさにうたれ、このヒマラヤを多くの人々に是非見せてあげたいものだと考えるようになりました。……日本ヒマラヤ山岳協会は低廉な費用で共にヒマラヤの旅を楽しみ、登山、学術、芸術などの諸分野で調査、研究、鑑賞を進めて行こうとする人々の集まりで、ヒマラヤを知ることによって、ヒマラヤの国々と日本との友好親善の架け橋となることも大きな目的として設立いたしました。……多くの方々が協会の意図するものに賛同していただき、ぜひ“世界の屋根”ヒマラヤを研究し、眺め、登り、そして、深い感動をいただきたいと思います。」

柴田会長のこの素朴な、そして、新鮮な考えかたに共鳴して協会を興したのは、名古屋を中心とする沖允人氏ら有志であった。設立の1967年は、ベトナム反戦の急激な高まり、中国文化大革命、そして国内では美濃部都政の誕生などに揺れていた年であった。

登山界では、10年ほど前から屏風岩、谷川岳など困難な岩壁の積雪期登攀が行われ、その黄金時代が一段落していた。56年のマナスル初登頂にはじまって、58年の深田久弥氏らのジュガル・ヒマラヤ遠征、そして、ヒマルチュリ、ビッグホワイト・ピークと続いたネパール・ヒマラヤの隆盛が65年からのネパール登山禁止で挫折していた。しかし、ヒマラヤへの情熱は67年からのヒンズー・クシュへのラッシュとなり、10余隊がパイオニア

の領域が濃厚な地域で目ざましい成果を上げつつあった。

65年にダウラ・ヒマールに遠征した沖氏ら協会設立の中心メンバーが掲げたのは「みんなのヒマラヤ」というモットーであった。67年10月に沖氏宅を事務局として発足した「日本ヒマラヤ山岳協会=H A A J=Himalayan Alpine Association of Japan」は翌年4月に会報「ヒマラヤ通信」第1号を発行している。会報1号には、エベレスト山麓ナムチェ・バザールへのホテル・飛行場の建設計画をネパール政府に提出したこと、第1回ヒマラヤの旅の募集などが収められている。「ヒマラヤの旅」の第1回は当時としては画期的な24名の会員が参加し、新鮮な感動は、後々の精力的な活動、会員相互の連帯感の基礎となっていた。羽田を飛び立つエア・インディアのエンジンの轟音を聞きながら柴田会長は、目をつぶって旅の無事を祈っていた。

ヒマラヤをみじかに引き寄せる原動力となった「ヒマラヤの旅」はその後連年実施され、創立5周年を記念した71年の90名が参加した大ツアーで頂点を迎えることになる。そして、ヒマラヤ・トレッキングの一般化にともない次第に参加者は衰退し、会員の関心は多様な変化を見せ、協会の活動領域は、地域的にはヒマラヤ全域・高地アジアの一部へと拡大し、旅から登山までの広いフィールドへと志向して行くことになる。

協会がヒマラヤ・トレッキングの分野で多くの情報を蓄積し、国内での一定のポジションを獲得したことは、72年10月発行の「岩と雪」27号でのトレッキング特集を会員が分担執筆したことでも

わかる。

しかし、この成果は登山界においては「トレッキング団体としてのHAAJ」という認識を植えつけ、後にはじまる登山遠征において障害をもたらすことにもつながった。けれど、文字通り雲の上の存在、一部の先鋭登山者の領域とされていたヒマラヤを、ひとり登山に限定されずに多くの人にとっての希望、現実へと誘導した業績は、わが国のヒマラヤへの歩みを語る上で断固として光り輝くものであると自負できよう。

71年6月まで発行されたB6判の「ヒマラヤ通信」には、すべてが開拓であった草創の時期の苦しみや感激、喜びが詰まっている。その新鮮さが今、痛いようにさえ感じられる。

展 開

HAAJとして最初にヒマラヤの頂上をめざしたのは、橋本広隊長らの69年ヒンズークシュ踏査隊であった。第2回ヒマラヤの旅ということで派遣された隊は、アフガニスタンのキンジャン山群の4千メートル峰4座に登頂した。

また、自分の所属する組織での遠征参加の経験を持つ会員も次第に増加し、70年からのネパールヒマラヤ登山禁止解除の動きもあって、会員の中では登山遠征の機運が大きな盛り上がりを見せてきた。特に、地方の会員にとっては、ヒマラヤ情報を吸収し、人的ネットワークをつくるだけでなく所属組織では実現しにくい遠征を協会の場に期待するという動きも出てきていた。

創立5周年をまじかにひかえた71年、柴田会長は「協会の体質改善」ととなえ、機関誌上で、総合的なヒマラヤの紹介・研究に加えて入域困難な地域への調査隊の派遣や登山隊の送り出しを今後の課題とし、専門的研究グループの発足を提唱した。既に以前から地域研究の有志活動が始まっていたが、これが組織化され、71年にはブータン研究会、ラダック研究会が発足した。

これらの研究会は、具体的な入域をめざして基礎的調査から入って行くもので、従来の「旅」という他者依存と異なり、自らが開拓者となり、自分たちのヒマラヤを創って行くという点において創立以来の組織の進化、会員の成長をシンボライ

ズするものであったといえよう。

いまでこそカネとヒマさえあれば自由に行けるこれらの地域は、当時、固く門戸を閉ざしており、この扉を押し開けることは至難の業であったのである。それだけに全てが新鮮であり、新聞が伝える国際情勢の小さな動きにさえ目を配り、あらゆるコネクションを動員してバリエーにチャレンジする喜びがあり、パイオニアとしての感動を味わうことが出来たのは素晴らしいことであった。そして、いずれの研究グループも後年、見事に目的を達成して行くことになる。

特に、空昌昭氏を中心とするラダック研究会の精力的な活動が切り開いた73年のラダック初入域は特筆されるべきものであり、後のカシミール、ラダック地域での連続する遠征への道を開くものでもあった。また、登山を志す会員と共に、広く地域のさまざまな分野に関心を持つ会員が一つのグループの中に共存して行ったことは、後の協会の登山遠征隊の特性をつくることに大きく貢献したと言えよう。

71年に最初の集まりを持った東北ヒマラヤ研究会は、“地方のヒマラヤ”の典型であった。彼らにとってHAAJこそヒマラヤへの希望であり新しい地平を切り開くものとしての存在そのものであった。研究会の中で東北を中心とした会員たちは貪るように情報に接し、いわゆる中央から来た先覚者、経験者たちと語り、同じ思いを持つ同志たちとのネットワークを急速に築いて行ったのである。明け方まで時間を惜しむように語りあい登山に限定しない広い視野でのテーマでのディスカッションや講義のレベルは高いものがあった。この研究会は、各県会員の持ち回りによる献身的な努力で回を重ねるほどに多くの人々を集め、東北というエリアを越え、HAAJ会員のワクを越えて全国的広がりをを見せて行くことになる。そして、研究会の報告書は、やがて「ヒマラヤ研究シリーズ」へと発展し、参加者は、協会の登山遠征や運営の中核として成長して行った。

現在、協会が日本のヒマラヤに関する情報センターとして揺るぎない地位を確保していることは自他ともに認めるところであるが、この基礎は既に60年代の終わりには萌芽していた。札幌の阿部

淳氏による「高山病ノート」は、地道な研究と組織活動を積み上げながら北海道地区をリードし、協会全般の運営を支えるその後の氏を予感させるものであり、また、協会の多彩な「ヒマラヤ学」のはしりでもあった。70年末から54回にわたり機関誌上に連載された「ヒマラヤ学入門」は、ヒマラヤの広大さ、奥深さをあらためて認識させ、行動の基礎を形成してくれた。「学」は驚くほど多彩にわたっている。なかには“お金を盗まれないために”というようなことまで含まれており、異文化の中で行動するためのノウハウがぎっしりと詰め込まれている。それは、会員が蓄積し、協会が獲得してきた豊かさとも言えるものであった。会員それぞれには、誇るべき「学」、伝えたい「学」があることを再確認させられる。

ヒマラヤ学と銘打たなくとも会員の体験や行動そのものが「学」であった時代、それを共有しようと積極的に協会がヨコのつながりを創って行った時代、それぞれの学に学び個々の豊かさを創るべく真剣になったダイナミックなときを持てたことは、率直に誇りにしてよい歴史である。

地域的には、初期のネパール・ヒマラヤから拡大して、インド亜大陸全域への傾倒が進んだ。特に1年間インドに留学しながらインド・ヒマラヤを広範囲に動き、実戦的な情報を絶えず発信し続けた沖氏の存在は記憶されるべきである。そして、ヒマラヤ学は「遠征学」として、戦略や戦術の実践論として発展して行った。しかし、頂上をめざす動きは少なからぬ初期会員の期待を減殺するものであった。

創立以来の協会の基礎を築き、会員のきずなを養ってきたものに「集会」がある。全国各地の山麓や街なかで持たれた集会は肩のこらない雰囲気濃厚にあり、会員にとって楽しいものであった。誰もが参加でき、自由に発言し、互いに知りえたことを喜びあう場であったと言える。その集会の場は、次第に目的化され、実践を前提とした過程の中に組み込まれ、せわしないものとなって行く。いずれの組織にとっても見られる会員意識の分化は協会にとっても例外ではなく、これをよしとしない会員の乖離が次第に多くなって行った。

一方でHAAJの体質変化に呼応して、自らの

ヒマラヤ登山の実現を夢見る多くの人間が結集しはじめていた。東北ヒマラヤ研究会のメンバーが主体となって設立した「小遠征研究グループ」の活動が始まったのは72年である。タテ社会の論理を否定し、広域のヨコ連携によるライトな登山をめざす論理が熱をもって展開され「Expedition研究グループ」へと拡大脱皮し、協会の体質を根本から変える巨大な力へと成長するのに長い時間は必要としなかった。

このような「高みへの序曲」とも言える動向の中で、カンジェラルワ（6,612m）遠征が最初の本格的遠征として登場してきた。

トレッキングから脱皮し、研究を深め、真剣な広範なヒマラヤをめざしつつあったHAAJではあるが、登山界一般の受け止め方はそれらの努力を正当には評価していなかった。或いは、殊更に評価しようとしない動きが存在していたと言える。その実態が表面化したのはカンジェラルワ遠征にからむ東京都山岳連盟加入問題であった。

ネパール・ヒマラヤ遠征を実施するには日本山岳協会の推薦状が必要であり、そのためには傘下の都道府県山岳連盟に加入することが不可欠であった。近い将来東京事務所を開設し、会員数も最も多い東京都を活動の本拠として都岳連に加入することが将来の活動基盤をつくるにふさわしいものとしての加盟申請は厚い壁に阻まれた。北海道の登山者をなぜ東京が推薦しなければならないのかという問題がこれに輪をかけてもいた。しかし、理解ある人々はHAAJの努力をきちんと見つめていた。小島六郎氏はその一人であった。難航した加入問題は決着し、次代への夢を担ったカンジェラルワは北海道グループの緻密な研究と高い技術を発揮し、73年、未踏峰の頂上に初めて協会の旗をひるがえした。

カンジェラルワの成功が登山をめざす会員に与えた希望は極めて大きいものがあつた。いわゆるExp研究を中心とする遠征の動きは具体的目標を持って加速され、その中で協会の将来像も激しく論議された。論議は急進的過ぎるくらいさえあり時に初期会員との隔絶を招いた。会員の交代現象が発生しはじめたのはこの頃からであるが、会員の絶対数は着実に増加して行った。

早くから設置したカトマンズ連絡所はランジャン氏特有の人柄もあって多くの会員に利用され、会員に限らず日本隊やトレッカーのネパールでのオアシスのような存在を果たしてきた。次いで設けたのがデリー事務所である。70年代に入ってインド登山界との接触を深めてくるなかでインド・ヒマラヤの比重は活動の中で大きく高まって行き、その中で現地事務所の設置にまで発展した。生活設備も整えた郊外のアパートは装備のデポ場所ともなり便宜を受けた会員は多い。カシミールのスリナガルには協会の土地を確保して山小屋設置の話さえ具体化し、実地検分まで行われたが建設にはいたらなかった。

このように現地事務所まで置こうというエネルギーは、現地との結びつきを深め、ヒマラヤ諸国を会員のみじかな存在、親しみある国とすることに大いに役立ったものである。だが、これらの事務所も現地関係者の死亡や情勢変化によってその後閉鎖された。

70年代前半、創立10周年を控えたHAAJは、「みんなのヒマラヤ」というモットーにおいてトータルな意味での頂点を迎えていたと言えよう。創立に携わった人間たちの夢は見事に開花したと言って過言ではない。

高みへの序曲

頂上をめざす環境が次第に整えられ、研究の場での討議や理論が深まるにつれ、実践への機運が熟してきたことを多くの会員が感じていた。

カンジェラルワはその引き金となり、また、登山界にはHAAJの実績がようやく浸透しつつあった。HAAJのかなりの会員が地方の海外登山関係で主要な役割を担うようになっていたのも幸いしていたと言えるし、70年代当初から頻繁に開催されるようになった各地の「ヒマラヤ集会」が会員外まで引きつけてきたことも大きい。東北ヒマラヤ研究会は、名称を東日本ヒマラヤ研究会へと拡大発展し、全国的規模を持つようになっていた。

74年ラムジュン・ヒマール遠征は正に協会の特性を発揮してつくられた本格的広域チームであり、その思想は、後年展開される遠征の原型をなすものであり、登山界全体においても高いレベルでリー

ドし得るまでに成長していた。74年秋に発行された「Expedition-1」は、頂上をめざす者たちの深い思索、革新の気にあふれ、「残るは実践」という闘志に満ちていた。ラムジュン・ヒマールは山倉隊長のもとに見事に新ルートからの登頂に成功し、75年の準備を進める者たちに大きな自信をもたらした。

75年ヌン(7,135m)遠征は、協会にとって一つの試練であった。遠征実現までの許可渉外のクリヤー、日印合同となった隊の運営困難なインド通関への対応など、HAAJが初めて直面する多くの問題を処理しながら進められた西郡光昭氏は、隊長としてボンベイにおいて実に足掛け3ヵ月の長い期間をひたすら隊貨の通関のために費やしたのだった。

ヌン登頂は成らなかったが、メンバーの中から将来の協会を担う人間たちが現れることになる。

一方、開かれたばかりのナンダ・デヴィ山群に向かった清水澄氏を隊長とするガルワール・ヒマラヤ隊は、数々の幸運に恵まれ、予期以上の成果を上げることが出来た。6,992m峰はリシ・パハール、7kmに近い無名峰はサーフ・ミナルと命名され、他に6km峰1座の初登頂をなし遂げた。

かくして74年から75年にかけての登山遠征の成果はめざましいものがあり、登山遠征を恒常的に組織し、活動の大きな柱として定着させ得る自信を植えつけ、外部に認識させたと言える。

一方、機関誌「ヒマラヤ」は、75年4月から毎月発行となり、編集体制も強化し、新たな編集方針のもとにスタートした。76年1月からは東京事務所もオープンした。各地のヒマラヤ集会や機関誌上での情報も遠征隊がもたらした成果を加えて充実したものとなり、会運営のバランスから見れば最も均衡した時期であったと言える。

研究会活動も新たに発足したチベット研究会、ワハン研究会、東部ヒマラヤ研究会等を加えて全ヒマラヤをカバーするに至り、全国各地で会員のコミュニケーションは深化して行った。これらの研究会はそれぞれに机上の論だけではなく実践目標を掲げ、未踏査の地域をめざしてあらゆるつてを求めての渉外活動を一方に伴っていた。ワハン研究会は、東海の有志を中心に組織され、76年の

バダクシャン遠征を実現させたが、ワハン回廊への夢はかなわなかった。東部ヒマラヤ研究会は、藤井毅氏の精力的なアッサム、アルナチャルへの傾倒を基盤とし、ブラマプトラの奥、ビルマ国境までの踏査を実現させるにいたった。

この時期のH A A Jの活動はインドにおいて当局の関心を引くまでに活発となり、インド登山界の多くの人々と人脈を形成し、後の合同遠征の基礎を築いて行った。また、国内においてはインド・ヒマラヤに関して他の追従を許さない膨大な情報とノウハウを蓄積し、登山界での権威を確立していた。

遠征が恒常的に実施される情勢にどう対応するか組織としての課題に上がってきた。登山隊の性格から1) H A A J直轄の隊 2) H A A Jの名で派遣するが資金等に隊自身が責任を持つ隊、3) 後援する隊、に分け、これを略称「ヒマラヤ委員会」が統括することに整理された。しかし、実質的には各隊とその推進グループの主導のもとに実施されて行った。

73年から76年にかけてのH A A Jの活動は本格的なヒマラヤ高峰登山が組織活動の中で定着する序曲であった。間もなく創立10周年を迎えようとしていた。

転 機

10周年は、特別の行事をすることもなかったが、来るべき15周年に向けて協会のありかたを真剣に考えようとする動きが急になってきた。それは、15周年記念事業として提案された「H & S 作戦＝ヒマラヤとシルクロード大作戦」を直接の契機とした。背景には登山への関心の高まりと傾斜、一方におけるH A A Jのモットーである「みんなのヒマラヤ」が衰退することの危惧があった。会員の少なからぬ部分、特に初期からの会員に登山への過度の傾斜、専門化を憂える声があった。“ヒマラヤへの関心”という共通項でのゆるやかな、肩の凝らない集まりというイメージが少しずつ変質してきていたのである。

H & Cは、前記のような背景を踏まえ、会員の多様なニーズを大きなフレームに統合し、個々が持つ多面的な能力を結集し、創立以来の蓄積を総

動員しようという極めて壮大な事業であった。8千m峰のライト・エクスペディション、中国からトルコまでのユーラシア全域にわたる踏査活動、各国での登山活動等々、足かけ3年、参加者180余名を予定していた。準備委員会が設けられ、機関誌には、H & S計画のページが特設され、計画のラフプランが提案され、各種の集会で盛んに検討された。

76年に提案されたH & Sプランであるが、75年春には、「H A A Jとは何か」という提起が機関誌上で稲田によりなされていた。それは10周年をひかえての組織整備、活動のあり方、将来像などを現状を踏まえて提起し、8千m峰遠征や大型ツアーなどの記念事業、会員拡大の方向や法人化等を提案していた。

結果的にH & Sプランは、総合事業として統括され、体系的に進められるにはいたらなかった。しかし、計画検討の過程で会員へのアンケートが実施され、それぞれが何をH A A Jに求めているかを把握する努力がなされた。また、計画を契機として「H A A Jを考える」というテーマでひょろろに多面的な提案や問題点の指摘、夢が機関誌のなかで連続的に掲載され、それをもとに各研究会や集会で会員の討論が花咲いたことは、極めて有意義なことであった。

今、H & S計画の内容をふりかえると、当時は全く破天荒で無謀とも認識されていた多彩な計画のほとんどがその後の活動の歴史の中で実現されていることに驚く。「志あれば、事ついに成る」ということわざがあるが、意思と夢の大切さをいまさらながらに感ずるのである。そして、夢を実現させる主体としての人間の可能性の素晴らしさに脱帽してしまう。

H & S計画は2年間にわたり検討され、多くのものを生み出し、H A A Jの将来の方向を決したと言って過言でない。その意味では大きな10周年記念事業であった。特に、76年4月4日の総会で、会の名称を「日本ヒマラヤ協会」と改め「山岳」を外し、より広範囲なヒマラヤでの活動に取組み、また、多くの会員を結集しようということが決定された上で取り組んだH & Sだけに、本会の歴史に永く記憶されるべきものである。

組織改編の大きな目玉として取り組まれた本会の法人化は、文部省当局との度重なる折衝にもかかわらず実現にはいたらなかった。あらためて登山会のありかた、そこに流れる旧態依然とした体質を痛感させられたものであった。

なお、78年度通常総会は、法人化の準備もあって、社団法人設立総会も兼ねて10月末に行われた。事務所を長年お世話になった名古屋の沖氏宅から東京の山森欣一氏宅に移し、役員体制も専務理事など大幅な入替えが行われた。これもまた、本会の大きな転機であった。執行体制の改編とともに、協会全体の組織の見直しが行われ、高所登山委員会、野外活動委員会等理事担当制による八つの専門委員会体制、会員の自主的研究グループとして八つの専門研究会の認定などがなされた。

ヒマラヤ登山学校もH&S検討の中で事業化したものである。高峰登山の基礎を学び、それぞれの実践に結びつけ、本会の特性を発揮して多くの人間にヒマラヤ登山という素晴らしい体験を提供しようとするものであった。

実質的な第一回は、カシミールのヌン（7,135m）で78年夏に実施され、成功をおさめ、また第2回のガルワール・ヒマラヤ隊も見事な成果をもたらした。その後も各山域で登山学校は継続され、登山学校を経験した者は57名に上り、80年代H A Jの登山の中核となり、また、それぞれの地域や組織でヒマラヤへの輪を広げていった。登山学校は、いわゆる公募登山隊とは全くことなるものであった。計画の当初から参画し、遠征のノウハウ、高所登山の技術をそれぞれの責任分担の中で学び、仲間がつくられて行くシステムは独立行動の出来る個人をつくり出し、組織の永続性をめざすものであった。

78年はまた、カラコルムへ最初のH A J隊が派遣された年でもあった。西郡光昭氏を隊長とするバツラⅢ峰（7,729m）隊の成立の背景には壮大な計画が秘められていた。Expedition研究会はラムジュン・ヒマールに続く二つの遠征を成功させた後、やがては超高峰への登山を展望していた。そして、カンチェンジュンガ縦走という破天荒とも言える計画が熱をもって語られ、その前哨戦として、バツラⅢ峰がプレ・カンチェンジュンガ

遠征として登場してきた。未踏の高峰であったⅢ峰に見事初登頂をおさめたことは、カンチェンジュンガへの夢を大きく引き寄せたものであった。

79年11月には、高田馬場に待望の独立事務所を持つことができた。悲願であった「ルーム」を獲得したことは、活動の質を大きく変えることにもつながり、専従職員体制が敷かれたH A Jは80年代へ向けて、大きく飛翔することになる。東日本ヒマラヤ会議は日本ヒマラヤ会議と改称しその第一回が山形で持たれた。

カンチェンジュンガ

80年3月に機関誌「ヒマラヤ」は100号を迎えた。記念の座談会の中で登山界のリーダーたちは、H A Jの飛躍を率直に評価すると共に、日本登山界に生まれたユニークな組織とその活動方法に期待を寄せると同時に、非常な興味をもって見ていたことがうかがわれる。

創立以来掲げられてきた「みんなのヒマラヤ」の歴史をうけ「創造するヒマラヤ」へと転換したH A Jだが、財政能力と事業、運営方式のギャップに執行部は常に苦しむ日が続いた。この悩みは今にいたるも解消されていない。財政難は、カンチェンジュンガ遠征で頂点に達したが、計画にはいささかのためらいもなかったのは、驚異でもあった。

カンチェンジュンガは、オールラウンドにヒマラヤに関わり、高所登山をその一方の柱とするH A Jの将来像にとってどうしても越えねばならない課題として認識された。組織にとって最初の8千m峰でありながら何故に超高峰、それも当時の世界登山界に類を見ない「縦走」という困難極まる課題を設定したのか、計画成立までの経緯をいま分析しても確たる答えは見つけられないのである。夢とかロマンとかいうものに、客観性とか必然性とかの理性はないのかもしれない。カンチェンジュンガはそれでこそ芽生えることが出来たテーマであったと言えよう。

しかし、ひとたび設定された目標はすさまじい魅力で人間を引きつけ、行動に駆り立てるものである。それが巨大であるほどに狂気ともいえる情熱が注がれる。カンチェンジュンガは正にそれで

あった。

80年の偵察に続いて、81年の本隊は4名の学術隊を加え総勢26名の巨大な隊となった。文字通りH A Jの持つ戦力を傾注した遠征であり多くの会員の支援を受けて実現した隊であった。隊はヤルン・カンと主峰の二つの超高峰に同日に10名の隊員が登頂に成功したが、主目的である縦走は成らなかった。しかし、この遠征に参加し、8千mを経験した隊員たちはこの後、現在にまでにいたるH A Jの活動の中核となっており、特に、80年代以後連続的に実施される遠征のリーダーシップをとるにいたる。形として大遠征となり、登山界の主流となりつつあった新しいヒマラヤの登り方から見れば画期的に評価されるものではなかったが、送りだした組織にとってはあらゆる意味でエポックメイキングな歴史を刻んだのである。

カンチェンジュンガは創立以来の頂点であると同時に、高みへの新たな出発点でもあった。

痛恨のナンダ・カート

カンチェンジュンガが終わると同時に冬期エベレストの計画が浮上した。エベレストはその絶対高度なるがゆえに常に目標たり得る魅力を保持している。しかも冬のエベレストは何にもまして極限の課題である。

カンチェンジュンガは登頂こそしたものの目的である縦走を成功させるには至らなかった。隊員と送りだした側には不完全燃焼があった。しかも、不完全燃焼ながらH A Jが保有する戦力は頂点を極めていた。組織として多分、これほどのパワーと情熱を結集出来る日が再び訪れてくるのではないかと思われた。かくて、冬期エベレストは必然のテーマと受け止めた。カンチェンジュンガのメンバーたちも燃えた。ルートはより困難な西稜に設定した。すべてを賭けて挑戦するにふさわしいルートであった。

早急な資金対策がとられ、そのメドが完全にたった数日後の10月上旬、全く思いもかけない驚天動地の知らせがインド・ヒマラヤから飛び込んできたのである。ガルワール・ヒマラヤ、ナンダ・カートにおけるH A J隊のアクシデントである。H A J創立以来の最初の遭難、しかも7名という

大量遭難であった。高所登山委員会では、続発するヒマラヤでの遭難を分析し、機関誌において特集を組んだ直後のことであった。

遭難の知らせを受けて捜索隊の派遣が決定され国外にあってエベレストに備えていた隊員は緊急にデリーに招集され、同時に冬期エベレストは無念の涙をのんで放棄された。捜索隊は冬迫る高所で超人的な捜索を行ったが7名の命は再び帰ることはなかった。

遭難対策は数ヵ月にわたり、厳しい対応を迫られた。何よりも初めて友を失うという哀しみにうちひしがれた。運命のあまりの非情さをかみしめた81年であった。

ナンダ・カートは、高所登山に取り組むことの厳しさ、2度と悲劇を繰り返すまいという確認を痛いほどに認識させた。しかし、遭難事故はナンダ・カートの翌年もH A J隊を襲うことになり、その後も繰り返し、悲劇は発生した。

原因の徹底した分析、防止への真剣な努力がなされつつも根絶は、いままってかなわない。ヒマラヤの巨大さ、人間の弱さを噛みしめる。

国外ネットワーク

協会は、発足当初からヒマラヤの各国と交流を持ってきた。創立者の柴田金之助氏は、協会が出来る前からネパールの若者を招請し、日本の大学で学ばせていた。

発足の初期はネパール・ヒマラヤを主たる活動対象とした関係から、ネパールとの交流がほとんどであった。タカリーの実力者インドラマン・セルチャン氏とは、息子のキラン君ともどもネパールに行く会員がお世話になったところである。

柴田氏の招請で日本の大学を卒業したランジャン氏は、カトマンズに低廉で親しみ易いホテルのエクスプレス・ハウスを開き、会員だけでなく日本の登山者やトレッカーのオアシスとなった。ランジャン氏のネパールにおける人脈や働きかけにより、主管の観光省や登山界、他に協会のコネクションが拡大された面もある。カンチェンジュンガ遠征の前後にネパールに滞在し、H A Jの国外渉外要員ともいふべき役割をつとめ、極めて困難な均衡をこなした菊地薫氏の努力は素晴らしいも

のがあった。菊地氏にはH A Jだけでなく多くの日本隊がお世話になったはずであり、記憶されるべき人である。

ネパール観光省登山局長S.R.シャルマ氏を招請したのが79年であり、氏はこのあと81年にもH A Jの招請で日本を訪れた。氏にはカンチェンジュンガ遠征やのちのムスタン遠征でも多大なお世話になったが、ちょうどネパール政府においても登山・観光復興の新たな検討が行われていた時期であった。H A Jとしては、外国人、登る側の立場から出来るかぎりの資料提供を行った。

インドとの最初の結びつきにも柴田氏の人脈があったが、「ヒマラヤの旅」とおしてのエア・インディアのコネクションは、インド登山界との関係を開拓した。

インド登山界で活躍していたM.S.コーリ氏やジョギング・シン氏は共にエア・インディアのスタッフであり、彼らをとおしてインド・ヒマラヤに関する多くの知見がもたらされ、また、何度かの来日をとおして多くの会員がインド・ヒマラヤに親しみを持つようになっていった。

インドとの交流過程でも最も重要な役割を果たしたのは沖允人氏であった。氏のずば抜けた渉外力、広く豊かなセンス、緻密な行動力が開拓したネットワークは驚くほど広範な分野にわたり、登山界に止まらなかった。この広いネットワークは会員にオープンされ、協会と会員の活動にはかりしれない力となったのである。75年の日印合同ヌン遠征は、その人脈の中から誕生した。氏の人脈を引き継ぎ、発展させた基盤の上に立って80年代中期からの日印合同による未踏の巨峰への遠征が実現されていった。

ナンダ・カートの大遭難はH A Jが遭遇した最大の悲しみではあったが、インド側との新たな交流の拡大ももたらしてくれた。遭難に際していち早く出動してくれたインドチベット国境警察〔ITBP〕はインド登山界の雄であり、外国人には閉ざされていた山域でもめざましい登山活動を展開していた。ITBPとの結びつき、信頼関係は、中心存在のフカム・シン氏を軸として深化し、84年からの連続する入域困難な未踏峰への合同遠征を実現させて行った。その頂点は、91年のシッキ

ム側からのカンチェンジュンガ合同遠征であった。

一連の日印交流の基礎にあったのは、インド登山財団（IMF）総裁のH.C.サリーン氏であった。81年に本会の招請で来日した氏は、豊かな外交センスを持ち、インド各界に大きな信頼を有する人物で、H A Jの活動をあたかく見守り、庇護し、アドヴァイスを与えてくれたことを感謝したい。

30年の歴史の中でインドでH A Jがお世話になった人々の数は膨大であり、いちいち名を記すのが困難なほどであるが、80年当初までの特に記憶すべき人のみを記した。

ブータン、中国、その他に関しては、歴史の中でふれて行く。

未踏を求めて

みんなのヒマラヤの時代からH A Jが一貫して追求してきたものに「未踏」へのチャレンジがある。未踏は、山だけでなく、地域、分野、方法など、前人の足跡のないところに行動のロマンを求めてきたのである。

初期は「ヒマラヤの旅」の一般化から始まり、次いで未踏の地域へと踏み出して行った。その主要なものを上げるだけでも、ラダック、ブータン、アッサム、アルナチャル、シッキム、ムスタン、西南中国と北西中国の広範な地域があり更に後年には、未踏峰への挑戦と併せた多くの外国人立ち入り制限区域への入域がある。

これら、入域困難な地域への踏査や登山を可能にした基盤には、綿密な地域研究が存在した。H A Jの各地域研究会が果たした役割は極めて大きなものがある。

地域研究は、単に研究に止まらず入域と実践行動を常に伴っていたところに力の源泉があった。この伝統は、登山隊にも引き継がれ、各登山隊は高いレベルの地域研究を引っ提げていたところにH A J隊の特性があった。研究と行動の両論が組み合って進んできたこと、それを可能にする広い人材を擁してきたところにH A Jの強みがあったと言えよう。

機関誌第90号から128号まで連載されてきた「未踏への誘い」は、インド・ヒマラヤとカラコ

ルムの未踏峰と未踏査の地域を網羅した。既に開拓の黄金時代は遠く過ぎたとはいえ、広大なヒマラヤにはまだまだ夢が残されていることを紹介するとともに、H A Jの80年代中期からの連続する未踏峰への挑戦の予告でもあった。

ブータン、ラダックへの初入域は、地域研究会が上げた大きな業績であるが、入域にとどまらず次の段階では、更に奥地へ、そして登山許可の取得へと進んだ。

ブータンのジチュ・ダケ南峰の初登攀、最高峰ガンカル・プンスムへの度重なるチャレンジ、東部カラコルムでのめざましい7千m峰の初登頂は、全く未踏のロマンから生まれた成果である。東部カラコルムの雄サセル・カンリ、ヤル・ツァンボ大湾曲部のナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ、ブータンのガンカル・プンスムの存在がさまざまな場で熱気をもって語られ、遥かな夢として登山を志す会員たちを引っ張って行ったのである。

H A Jは、ヒマラヤへは遅れて参入したが、独自の努力により、「未踏の最後の輝き」をつくりあげたと言えよう。

ネパールのムスタンへのチャレンジも記憶される出来事である。ムスタンは皆が憧れる一つの象徴ともいえるものだった。ムスタン王やネパール王室関係をはじめとするさまざまな関係への強力な働きかけは、ブリクティ・サイルの初登頂となって結実し、ダモダール・ヒマールの知られざるパノラマを世に紹介した。

80年に始まったインド・ヒマラヤ会議は、H A Jのインドに於ける活動と情報集積を象徴するものである。この会議は、インド・ヒマラヤに関する最も権威あるインフォメーションの場として現在も継続され、インドへ出掛ける日本隊にとっては必ず参加しなければならないまでに成長している。この会議を支えてきた基礎には、地道な地域研究と旺盛な、連続するインド・ヒマラヤでの登山活動と、引き継がれ、フォローアップされてきた人脈が存在する。

中国への展開

中国が登山者に門戸を開きはじめたのは79年からであるが、H A Jが実際にアプローチしたのは

82年からである。中国領ヒマラヤへは、日本山岳会をはじめとする日本隊が活動しはじめていたがH A Jは、ネパール、インドへの傾注が続いており、地域研究の段階にあった。82年カトマンズでのU I A A総会での中国登山協会代表団との接触が最初である。

そして、83年に稲田、山森が北京へ飛んだのを契機として本格的な展開が始まる。

中国登山協会との協議は以後、堰を切ったように集中的に行われ、スークーニャン山群への隊の派遣を皮切りに全域、特に西南中国とチベットへの派遣が現在まで連続している。

最大の目標は、未踏の最高峰であったナムチャ・バルワにあった。ナムチャ・バルワをめぐる中国側への渾身の渉外が行われ、将来の合同登山をめざして岩登りの技術コーチまで派遣されたが、挑戦の機会はずいぶん訪れなかった。しかし、ナムチャ・バルワの存在が中国での活動の大きな牽引力となり、ナムチャ・バルワの未踏が消滅してからも変わらぬ活動を連続する基盤をつくったことは、この巨峰へのこだわりが無駄ではなかったことを示している。

80年代の中国領ヒマラヤにはまだ、パイオニア・ワークの余地が十分に残されていたのは幸運であった。その中でも、クラウンはナムチャ・バルワに次ぐ魅力を持ち、また、H A Jの渉外が生み出した珠玉の名峰といえよう。

しかし、85年前から92年にわたる3回のトライは成功するに至らず、この山に情熱を燃やし続けた3名の命さえ失われたことは何としても悔やまれることである。

チベットに未踏の7千m峰が幾つも残されていたことは幸運であり、われわれはヒマラヤ黄金の時代の最後の残照を経験することが出来た。特に、86年、グレート・ベンドの名峰ギャラ・ペリの初登頂の栄誉を担うことができたのは記念すべきことであった。

86年から87年は、正に怒濤の活動が展開され、カルジャン、チョウ・アウイ、ラプチュ・カンと続いた7千m峰初登頂は、正に、奇跡ともいえる幸運であり、この後、同様の成果を上げた東部ヒマラヤの7千m峰の初登頂と合わせて日本のヒマ

ラヤ登山において永く記憶されるべきエポックであると言える。

7kmのピーク・ハンティングの後を次いだのが西南中国を中心とした6kmの未踏へのチャレンジである。既に、中国との接触の初期から横断山脈を主とする魅力的な山への度重なる渉外は中国側も驚きの目で見ている。84年の雲南のユイロンがその最初であり、86年から本格化した。特に、アプローチが比較的至便であり、短期間で登れる四川の山々は、多くの会員にとってヒマラヤ登山への入門の場を提供してくれた。

この地域への登山は以後、現在まで継続され、更に新しい地域と目標が限りなく広がりつつある。特筆されることは、この地域の研究が個人のしつような興味と努力によって成されていることである。山森欣一氏による地域研究は、自らの実践を踏まえて最大の情報を提供し、また、多くの会員たちを西南中国・チベット地域の登山に組織しており、H A Jのロマンを継承し、登山界へ刺激を与え続けている。

以上の実践行動は、山と地域に関して大きな研究・情報の蓄積をもたらし、83年の中国登山研究会を最初としての一連の研究会の開催や「中国登山の手引き」等をとおして広く公開されてきたところである。また、これまでの集大成としての地域クロニクルが編まれている。

日印合同遠征

H A Jとインドとのきずなは、初期のネットワーク構築を経たのち、インド・ヒマラヤでのトレッキングの開拓となり、入域困難な地域への初入域から登山の時代へと発展してきた。インド・ヒマラヤは規制が多く、一部を除き、7km峰の大半は、単独隊では許可取得が困難な情勢にあった。この事情は基本的に今も変わらない。

特に、H A Jが伝統としてきた未踏峰主義は、インド・ヒマラヤでは困難な壁が存在していた。魅力的な高峰のほとんどは、北の国境に引かれたインナーラインの彼方にあり、外国人の立ち入りを厳しく制限していたのである。このインナーラインのバリエーションを突破するための精力的な活動は70年代前期から続けられてきた。合同遠征の最初

は75年のヌン遠征であったが、これはジャム&カシミール州とのジョイントであり、中央レベルではなかった。

前途のように、80年に始まったインド・ヒマラヤ会議は、インド登山に取り組むH A Jの積極的な姿勢の具現化であり、インド登山財団（IMF）との強い接触をもたらす契機となった。81年にIMF総裁のH.C.サリーン氏がH A Jの招請で来日されたことは、のちの連携への基礎になった。

サセル・カンリへの夢に始まった東部カラコルムへの憧れは、サリーン氏をはじめとするIMFの協力に助けられ、10余年の歳月を要してこの地域の未踏の最高峰マモストン・カンリへと結実した。

インド陸軍を主体とするインド側とH A Jの最初の本格的合同登山はマモストン・カンリの初登頂をもってはじまった。この遠征で日本側リーダーをつとめた尾形好雄氏はこのあと連続して行われる日印合同隊の中核となって活躍した。

翌年は、念願のサセル・カンリII峰が、インドチベット国境警察（ITBP）との合同により登られた。最初にサセル・カンリへの夢を提唱した沖氏が隊長をつとめたのは幸いであった。インド側隊長のフカム・シン氏は、この遠征以後引き続き日印合同の主役となっていった。88年のリモも合同隊により初登頂の榮譽に輝いた。

このようにして養われた両国のジョイントの成果が結集されたのが91年のカンチェンジュンガである。シッキム側からのトライは、70年代後期からの13年にわたる念願であった。合同隊は、困難な北東支稜からの登頂に成功したが1人のインド隊員の命が失われたことは極めて残念であった。

日印合同遠征は、ピラミッド・ピーク、サラスワティと続けられ、また、登山だけでなくブラマプトラ川の中印国境からのラフティングも実施された。H A Jにとって日印合同は歴史に残る成果を上げたが、インド登山界にとっても一つの時代を画したと思われる。遠征に参加した隊員を中心にエベレスト、他においてインド隊の活躍が見られた。

カラコルムの光と影

カラコルム、ヒンズークシュ山域におけるH A Jの活動は、他の地域に比べればずっと少ない。78年のバツラⅢ峰の後にこの地域に入るのは84年まで待たねばならなかった。

そして、84年ナンガ・パルバットは、たとえようもない悲劇をもたらした。最も困難といわれるルパール壁に挑んだ角田不二氏ら4名は、壁から帰ることがなかった。

飛田和夫氏の情熱が実現した85年K 2は見事に成功をおさめ、氏を中心にカラコルムへのトライが続いて今に至っている。

帰らざる人々

1967年の創立から30年、この歴史の中で2千6百名の会員が協会の名簿に名を連ねた。それぞれの会員が、それぞれの歴史を協会史に刻み、また、自分史を創り、大いなる喜びをヒマラヤからいただいてきたと言えよう。

しかし、20名の人間たちは、ヒマラヤから帰ってきていない。既に記したように、最初のヒマラヤでの死は81年ナンダ・カートからもたらされた。7名というヒマラヤ登山史上稀に見る悲劇であった。

その後も哀しみは幾度も繰り返された。ナンガ・パルバットでの4名の死、クラウンでの2人、ミニヤ・コンカでの4人をはじめとし、30年間で7隊20名、登山に参加した者の3%の会員の命が失われていることに慄然とする。そして、帰らざる

者たちの多くはH A Jのさまざまな活動の中核となって歴史を支えてきた素晴らしい人間たちだった。それぞれの事故は、機関誌上や報告書などで分析され、2度と繰り返すまいとの努力が尽くされてきた。しかし、巨大なヒマラヤに対して人間の力や考えは余りにも小さい。ストップ・ザ・アクシデントをスローガンとしての研究や対策にもかかわらず、ヒマラヤに向かう限り、この命題に直面して行かねばならないだろう。

30年を迎えるにあたり、帰らざる人々をあらためて想起し、その冥福を祈り、功績に感謝を捧げるものである。

終わりに

正しく歴史をふりかえり、歩みを記すことはほとんど不可能である。「評価は歴史によって下される」といわれるが、正しい言葉ではないような気がする。まして、H A Jという任意の団体が歩んだ歴史を評価し、総括するなどということは大きな意味は持たない。

30年の足跡を繰り返しながら強く感ずるのは組織に反映し、これを動かす個人のエネルギーである。それぞれの時をそれぞれの人間たちが担ってきた。H A Jという組織は、個人史をつくる舞台としては、他の組織より柔軟に機能してきたと言える。この特性を失うことなく年輪を重ねて行きたいものである。

多くのことを書き漏らした気がする。30年史の中でそれぞれ感慨で振り返っていただきたい。

原稿募集

ニュース ヒマラヤ（高地アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc……………。

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、写真3～5枚、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、何でも結構です。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合わせ用に使用します。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬米ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部 TEL 03 (3988) 8474 FAX 03 (3988) 8502

H A J 年別山別入山集計表

() 内は中高年者数

	山 名	男			女		合 計			平均年	国
		入山	登頂	死	入山	登頂	入山	登頂	死		
1971	コラホイ	4(1)	0(0)	0			4(1)	0(0)	0	33.5	I
1973	カンジェラルワ	6(0)	5(0)	0			6(0)	5(0)	0	29.3	N
1974	ラムジュン・ヒマール	6(1)	4(0)	0			6(1)	4(0)	0	35.5	N
1975	ヌ ン	7(0)	0(0)	0			7(0)	0(0)	0	28.7	I
	リシ・パハール	7(0)	6(0)	0			7(0)	6(0)	0	31.4	I
	1975年小計	14(0)	6(0)	0			14(0)	6(0)	0		
1976	コー・イ・ムンジャン	9(0)	4(0)	0			9(0)	4(0)	0	29.7	A
1977	コムニズム	3(1)	2(1)	0			3(1)	2(1)	0	34.0	S
1978	バトゥラⅢ	10(0)	3(0)	0			10(0)	3(0)	0	29.0	P
	ヌ ン	9(2)	4(0)	0			9(2)	4(0)	0	33.8	I
	トリスル	17(0)	6(0)	0	2(0)	0(0)	19(0)	6(0)	0	28.4	I
	1978年小計	36(2)	13(0)	0	2(0)	0(0)	38(2)	13(0)	0		
1979	キャッシュドラル	9(1)	0(0)	0	4(0)	0(0)	13(1)	0(0)	0	29.7	I
1980	カンチェンジュンガ偵察	7(0)	0(0)	0			7(0)	0(0)	0	30.1	N
	ケダルナート・ドーム	17(0)	16(0)	0	3(0)	3(0)	20(0)	19(0)	0	28.8	I
	1980年小計	24(0)	16(0)	0	3(0)	3(0)	27(0)	19(0)	0		
1981	カンチェンジュンガ	21(0)	10(0)	0	1(1)	0(0)	22(1)	10(0)	0	31.2	N
	ナンダ・カート	8(1)	0(0)	7			8(1)	0(0)	7	32.4	I
	ランタン・リ	7(1)	5(0)	0			7(1)	5(0)	0	32.0	N
	ナンダ・カート搜索	12(0)	0(0)	0	2(0)	0(0)	14(0)	0(0)	0	29.6	I
	1981年小計	48(2)	15(0)	0	3(1)	0(0)	51(3)	15(0)	7		
1982	ブリクティ・サイル	9(1)	7(0)	0			9(1)	7(0)	0	31.1	N
	ク ン	15(2)	0(0)	1	2(0)	0(0)	17(2)	0(0)	1	31.7	I
	マナスル (冬期)	10(1)	0(0)	1			10(1)	0(0)	1	31.8	N
	1982年小計	34(4)	7(0)	2	2(0)	0(0)	36(4)	7(0)	2		
1983	ヌ ン	7(0)	3(0)	0			7(0)	3(0)	0	31.6	I
	スークーニャン	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	30.5	C
	1983年小計	9(0)	3(0)	0			9(0)	3(0)	0		
1984	ユイロン	3(0)	0(0)	0	1(1)	0(0)	4(1)	0(0)	0	38.3	C
	ジチュ・ダケ	9(2)	5(1)	0			9(2)	5(1)	0	33.8	B
	ナムナニ偵察	3(2)	0(0)	0			3(2)	0(0)	0	40.0	C
	ナンガ・パルバット	4(0)	0(0)	4			4(0)	0(0)	4	27.5	P
	マモストン・カンリ	5(1)	5(1)	0			5(1)	5(1)	0	33.2	I
	ナンガ・パルバット搜索	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	30.0	P
	1984年小計	26(5)	10(2)	4	1(1)	0(0)	27(6)	10(2)	4		
1985	ヤラダツォ	6(0)	6(0)	0			6(0)	6(0)	0	32.5	C
	K 2	16(1)	3(0)	0			16(1)	3(0)	0	34.1	P
	サセール・カンリⅡ	5(3)	0(0)	0			5(3)	0(0)	0	39.8	I

	ムーシュ・ムスターグ				7(2)	0(0)	7(2)	0(0)	0	34.1	C
	ガンカル・プンスム	9(1)	0(0)	0	1(0)	0(0)	10(1)	0(0)	0	31.7	B
	クラウン	10(1)	0(0)	0	1(1)	0(0)	11(2)	0(0)	0	36.0	C
	ギャラ・ペリ偵察	2(1)	0(0)	0			2(1)	0(0)	0	36.5	C
	1985年小計	48(7)	9(0)	0	9(3)	0(0)	57(10)	9(0)	0		
1986	ネームレス・タワー	3(0)	0(0)	0			3(0)	0(0)	0	34.0	P
	シュエバオ・ディン	9(3)	7(2)	0	1(0)	1(0)	10(3)	8(2)	0	37.5	C
	キンナウル・カイラス				5(0)	0(0)	5(0)	0(0)	0	30.6	I
	ラブチュ・カン偵察	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	31.5	C
	カルジャン	6(1)	5(1)	0			6(1)	5(1)	0	33.8	C
	チョー・アウイ	10(1)	10(1)	0			10(1)	10(1)	0	31.5	C
	ギャラ・ペリ	6(1)	3(0)	0			6(1)	3(0)	0	33.2	C
	1986年小計	36(6)	25(4)	0	6(0)	1(0)	42(6)	26(4)	0		
1987	ゲ ニ	10(2)	0(0)	0	3(2)	0(0)	13(4)	0(0)	0	35.8	C
	ヌ ン				5(1)	2(0)	5(1)	2(0)	0	34.8	I
	ラブチュ・カン	9(3)	7(2)	0			9(3)	7(2)	0	31.7	C
	1987年小計	19(5)	7(2)	0	8(3)	2(0)	27(8)	9(2)	0		
1988	シンチン	8(2)	0(0)	0			8(2)	0(0)	0	32.6	C
	ゲ ニ	5(2)	5(2)	0	2(1)	2(1)	7(3)	7(3)	0	36.7	C
	リ モ	7(4)	6(3)	0			7(4)	6(3)	0	41.7	I
	ガッシャーブルムⅡ	5(2)	0(0)	0	1(0)	0(0)	6(2)	0(0)	0	35.7	P
	シシャパンマ	4(0)	3(0)	0			4(0)	3(0)	0	30.8	C
	チョー・オユー	4(0)	4(0)	0			4(0)	4(0)	0	30.8	C
	1988年小計	33(10)	18(5)	0	3(1)	2(1)	36(11)	20(6)	0		
1989	ヴァスキ・バルバット	3(2)	0(0)	0			3(2)	0(0)	0	43.0	I
	シャラリ	7(5)	0(0)	0	2(0)	0(0)	9(5)	0(0)	0	40.4	C
	チョモランマ	9(3)	0(0)	0			9(3)	0(0)	0	33.6	C
	1989年小計	19(10)	0(0)	0	2(0)	0(0)	21(10)	0(0)	0		
1990	サトバント	7(4)	7(4)	0	3(2)	2(2)	10(6)	9(6)	0	40.0	I
	クラウン	7(2)	0(0)	2(2)			7(2)	0(0)	2(2)	34.9	C
	1990年小計	14(6)	7(4)	2(2)	3(2)	2(2)	17(8)	9(6)	2(2)		
1991	カンチェンジュンガ	12(2)	3(0)	0	2(1)	0(0)	14(3)	3(0)	0	32.0	I
	ヌ ン	11(5)	3(1)	0	1(1)	0(0)	12(6)	3(1)	0	40.5	I
	シュエバオ・ディン	12(6)	7(3)	0	1(1)	1(1)	13(7)	8(4)	0	39.1	C
	ミニヤ・コンカ	12(3)	0(0)	0			12(3)	0(0)	0	32.5	C
	1991年小計	47(16)	13(4)	0	4(3)	1(1)	51(19)	14(5)	0		
1992	シンチン	6(2)	2(0)	0			6(2)	2(0)	0	34.7	C
	ムスターグ・アタ	10(4)	0(0)	0	1(0)	0(0)	11(4)	0(0)	0	40.2	C
	ヌ ン	13(1)	8(1)	0	1(1)	0(0)	14(2)	8(1)	0	33.4	I
	サラスワティ				6(1)	6(1)	6(1)	6(1)	0	35.3	I
	ダーク・ニャン	7(6)	7(6)	0			7(6)	7(6)	0	48.9	C
	クラウン	10(4)	0(0)	1	1(0)	0(0)	11(4)	0(0)	1	40.2	C

	1992年小計	46(17)	17(7)	1	9(2)	6(1)	55(19)	23(8)	1		
1993	ピラミッド・ピーク	5(2)	5(2)	0			5(2)	5(2)	0	36.2	I
	ムスターグ・アタ	11(4)	11(4)	0			11(4)	11(4)	0	39.2	C
	ヌン	6(1)	0(0)	0	1(0)	0(0)	7(1)	0(0)	0	33.0	I
	ユイチュ	6(6)	2(2)	0			6(6)	2(2)	0	44.8	C
	1993年小計	28(13)	18(8)	0	1(0)	0(0)	29(13)	18(8)	0		
1994	ルンボ・カンリ	8(6)	0(0)	0	1(0)	0(0)	9(6)	0(0)	0	39.6	C
	ユイシュ				4(3)	4(3)	4(3)	4(3)	0	44.0	C
	ユイチュ	5(5)	5(5)	0	1(1)	1(1)	6(6)	6(6)	0	47.8	C
	ムスターグ・アタ	7(5)	7(5)	0			7(5)	7(5)	0	44.4	C
	ミニヤ・コンカ	6(2)	0(0)	4	1(1)	0(0)	7(3)	0(0)	0	35.9	C
	1994年小計	26(18)	12(10)	4	7(5)	5(4)	33(23)	17(14)	0		
1987	クンヤン・チッシュ	3(2)	0(0)	0	1(1)	0(0)	4(3)	0(0)	0	42.5	P
	ヌン	10(6)	4(1)	0	1(1)	0(0)	11(7)	4(1)	0	41.6	I
	1995年小計	13(8)	4(1)	0	2(2)	0(0)	15(10)	4(1)	0		
1996	ムスターグ・アタ	6(4)	5(3)	0			6(4)	5(3)	0	41.3	C
1997	クーラ・カンリⅡ	7(6)	0(0)	0			7(6)	0(0)	0	44.0	C
	ムスターグ・アタ				6(5)	4(3)	6(5)	4(3)	0	44.5	C
	ニンチン・カンサ	13(9)	9(6)	0			13(9)	9(6)	0	43.4	C
	1997年小計	20(15)	9(6)	0	6(5)	4(3)	26(20)	13(9)	0		

★1971年～1997年＝27年間総合計

入山者数：81隊 658人〔内 中高年者数 180人 27.4%〕

〔内 女性 75人〔内 中高年者数 28人 37.3%〕〕

〔但し、偵察＝4隊14人、捜索＝2隊14人、試登＝1隊2人が含まれている〕

平均年齢：70年代前半＝ 32.8歳 後半＝ 30.6歳

80年代前半＝ 32.8歳 後半＝ 34.7歳

90年代前半＝ 39.2歳 後半＝ 43.3歳

27年間平均＝ 35.4歳

登頂者数： 255人〔内 中高年者数 69人 27.1%〕

〔内 女性 26人〔内 中高年齢数 12人 46.2%〕〕

登 頂 率：38.8%

死亡者数：7隊 20人〔内 中高年齢数 2人 10.0%〕全て男性

死 亡 率：3.0%

★国別入山状況

中 国＝38隊 281人 (42.7%) インド＝ 25隊 234人 (35.6%)

ネパール＝7隊 67人 (10.2%) パキスタン＝7隊 45人 (6.8%)

ブータン＝2隊 19人 (2.9%) 旧ソ連＝ 1隊 3人 (0.5%)

アフガニスタン＝1隊9人 (1.4%)

1997年パキスタン登山結果

パキスタン政府観光局によれば、1997年には73隊が登山申請し、内11隊が何らかの事情で申請を取り消ししている。許可を取得した62隊中、実際に登山活動に至った隊は16ヶ国57隊延べ500人に及んだ。その内訳は、最多数は日本の16隊128人、次いで韓国の7隊61人、スペインの7隊45人、アメリカの6隊47人、イタリアとドイツからはそれぞれ3隊、イギリス、イラン、フランス、ポーランドからは各2隊で、チェコ、スウェーデン、スイス、ウクライナ、オーストラリアからは各1隊となっている。また、この他にパキスタン・チベット登山協会とパキスタン・フランスの2隊の合同隊があった。なお、イラン隊がパキスタンで登山を展開するのは、初めてのケースである。

57隊中40隊は8千メートル峰を目指した登山隊であるが、特筆すべき隊としては、ポーランドのアンドレ・ザヴァダ率いる隊が冬期ナンガ・パルバットを目指してこれから入山する。

今年の特徴としてはノーマル・シーズンに8千メートル峰を目指した39隊中29隊が登頂に成功し

ているが、この傾向は8千メートル峰に限らずそれ以下の標高の山でも17隊中11隊が登頂しており、今年のパキスタンでの登山隊の成功率はかなり高かったと言える。

登山料の総計は531,200ドル、従事したスタッフは連絡官57人、ポーター3,190人、ガイドやコック、高所ポーター計113人となった。

環境保護の面から見ると、10隊がテントやロープを高所に残置したためのペナルティを課せられ、その集計額は千ドルにも及んだ。ペナルティを課せられた隊が、57隊中わずかに10隊というのは少々疑問に感じるところではある。

開放地区へのトレッキング隊数は許可取得や届け出が不要のため把握できないが、制限地区へのトレッキング申請数は197隊1,102人、その内最も人気の高いバルトロ〜コンコルディアコースへの申請は159隊845人であった。トレッキング料の総額は24,560ドル、ポーター2,813人、ガイドもしくはアシスタント・ガイド200人、コック、もしくは、アシスタントコック137人となっている。

入山者数の増加に伴い遭難事故も増え、今年も多く登山者が高山病や凍傷で救助要請を出し、パキスタン軍のヘリコプターのお世話になった。

死亡者数は登山者9人、ポーター1人の計10人であった。死亡者9人中7人は日本人であり、ブロード・ピークでの雪崩事故で1人、そしてスキルブルムでの懸垂氷河崩壊に伴う爆風雪崩で就寝中の6人が死亡したものである。

また、登山許可を必要としない山での登攀中の事故のため、このリストには載っていないが、レディス・フィンガーでも日本人1人の死亡事故が起きている。

登山隊並びに制限地区入域トレッキング隊が連絡官やポーター、ガイドなどに支払った人件費は、569,160ドルに及んだ。

余談ながら、隊員変更の通知の遅れに起因するビザ発給の障害を受けた隊が2、3あったと聞く。隊員に変更のあった場合には、速やかにその旨の手続をすることをお忘れなく。

国別登山隊数一覧

	国名	登山隊数	隊員数
1.	日本	16	128
2.	韓国	7	61
3.	スペイン	7	45
4.	アメリカ	6	47
5.	イタリア	3	57
6.	ドイツ	3	40
7.	フランス	2	23
8.	イラン	2	22
9.	合同	2	21
10.	ポーランド	2	14
11.	イギリス	2	15
12.	チェコ	1	8
13.	スウェーデン	1	7
14.	スイス	1	5
15.	ウクライナ	1	5
16.	オーストラリア	1	2
	計	57	500

パキスタン登山結果一覧1997

※数字その他はパキスタン観光省のリストに準じた

山 名	標高	国 名	隊 長 名	隊員数	期 間	結 果	備 考
ナンガ・パルバット	8,125	パ蔵合同	Sam Druk	14	5 / 3 ~	○	2名雪崩死亡
ガッシャーブルムⅣ	7,925	韓国	Sung Dae Cho	12	5 / 10 ~	○	
ブロード・ピーク	8,047	静岡県岳連	松永義夫	11	5 / 12 ~	×	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	アメリカ	Fred Barth	12	5 / 15 ~	○	
ナンガ・パルバット	8,125	韓国	Pack Sang See	10	5 / 15 ~	○	西壁初登攀
ブロード・ピーク	8,047	スペイン	Inurrategi Felix	4	5 / 15 ~	○	
ガッシャーブルムⅣ	7,925	スペイン	M.A.Redriguez	5	5 / 17 ~	×	
ナンガ・パルバット	8,125	韓国	Key Joong	11	5 / 19 ~	○	
K 2	8,611	JAC東海	田辺 治	23	5 / 24 ~	○	西壁初登攀
K 2	8,611	スペイン	J.R.Aguirre	10	5 / 27 ~	×	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	イギリス	David Hamilton	10	6 / 1 ~	○	
ブロード・ピーク	8,047	群馬岳連	後藤文明	8	6 / 2 ~	○	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	同 上				○	単独
ガッシャーブルムⅠ	8,068	群馬岳連	佐藤光由	11	6 / 2 ~	×	
ブロード・ピーク	8,047	同 上				○	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	群馬岳連	名塚秀二	13	6 / 2 ~	○	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	同 上				○	単独
ガッシャーブルムⅠ	8,068	韓国	Hyun-OK Ji(Ms)	5	6 / 4 ~	○	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	JFMA	常陸民雄	6	6 / 5 ~	○	
ナンガ・パルバット	8,125	チーム84	澤田 実	5	6 / 5 ~	○	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	岩峰登高会	木村功二郎	2	6 / 5 ~	○	単独
ブロード・ピーク	8,047	ドイツ	Peter Goggemos	15	6 / 5 ~	○	
ラトックⅡ	7,108	ドイツ	Alexander Huber	13	6 / 7 ~	○	
バインタ・ブラック	7,285		同 上			○	
トランゴ・タワー	6,237	スウェーデン	Jan Stenstem	7	6 / 8 ~	○	単独
ナンガ・パルバット	8,125	パ仏合同	Ashraf Aman	7	6 / 8 ~	○	
ナンガ・パルバット	8,125	関西登高会	梶原正勅	7	6 / 9 ~	○	
ナンガ・パルバット	8,125	ウクライナ	V.S. Denko	5	6 / 10 ~	○	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	G登攀クラブ	藤原拓夫	5	6 / 11 ~	○	単独
マッシャーブルム	7,821	スペイン	Manuel Miranda	8	6 / 12 ~	×	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	イラン	A.K.Sadegh	11	6 / 13 ~	○	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	イタリア	Mennual Lugli	19	6 / 15 ~	○	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	同 上				○	単独
ガッシャーブルムⅡ	8,035	イタリア	Rybicka josef	27	6 / 15 ~	○	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	韓国	Song Dong lee	14	6 / 15 ~	○	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	韓国	Park-Houng Seok	5	6 / 15 ~	○	
ブロード・ピーク	8,047	アメリカ	William T.Kieser	12	6 / 15 ~	○	単独
ブロード・ピーク	8,047	スペイン	R.Soler Rich	6	6 / 19 ~	×	
プーパラシュⅠ	6,824	北九州	成末洋介	3	6 / 19 ~	×	

山 名	標高	国 名	隊 長 名	隊員数	期 間	結果	備 考
ナンガ・パルバット	8,125	アメリカ	Carlers P.Buhler	8	6/23～	○	隊長死亡
ブロード・ピーク	8,047	イタリア	K.Kunstantion	11	6/23～	○	
ナンガ・パルバット	8,125	イギリス	Alan Hinkes	5	6/25～	×	
ブロード・ピーク	8,047	アメリカ	Michael S.Marolt	7	6/25～	○	
ブロード・ピーク	8,047	オーストラリア	Andrew Lock	2	6/25～	○	
グレート・トランゴ	6,231	アメリカ	Walter Barker	4	6/26～	○	
グレート・トランゴ	6,286	韓国	Lee Sang-Cho	4	6/29～	○	
ナンガ・パルバット	8,125	スペイン	Joan C.Vila	6	7/1～	○	
ナンガ・パルバット	8,125	チェコ	Leopold Sulovsky	8	7/1～	×	
スパンティーク	7,027	スペイン	Pedro Vdaendo	6	7/3～	○	
ラカボシ	7,788	イラン	R.S.Baghini	11	7/8～	○	6名爆風雪崩死亡
スキルブルム	7,360	神奈川ヒマラヤ	広島三朗	16	7/11～	○	
ラトック I	7,145	アメリカ	Mark A.Richey	4	7/12～	×	
ガッシャーブルム II	8,035	スビダーニュ	坂原忠清	6	7/21～	×	
フンザ・ピーク	6,230	ウータンクラブ	宮地由文	6	7/21～	×	
ナンガ・パルバット	8,125	日パ合同	細田一郎	3	7/23～	×	
マルビティン	7,453	スイス	D.Funschilling	5	7/23～	○	
ディラン	7,257	豊橋山岳会	中山秀樹	3	7/23～	○	
ナンガ・パルバット	8,125	ポーランド/スイス	Wojciech Kurtyka	2	7/25～	×	
ディラン	7,266	ドイツ	Eckhard Radehose	12	7/29～	×	
スパンティーク	7,027	フランス	Daniel Petraud	14	7/30～	○	
ガッシャーブルム II	8,035	フランス	Soulie Jacques	9	9/1～	×	
ナンガ・パルバット	8,125	ポーランド	Andrzej Zawada	12	12/15～		

・資料提供：日パトラベル

過去 5 年間にける登山隊の推移

過去 5 年間にける 制限地区トレッキング隊の推移

年	隊数	隊員数	成功数	登山料
1993	59	431	23	177,500
1994	50	393	21	407,216
1995	56	409	24	389,751
1996	56	409	24	401,900
1997	57	500	40	531,200

年	隊数	人数	トレッキング料
1993	97	631	14,300
1994	128	697	17,800
1995	129	823	21,380
1996	166	912	18,880
1997	197	1,102	24,560

お願い

既にご承知のように、これまでパキスタンでの登山申請に必要とされてきた日本山岳協会の推薦状は不要となりました。しかしながら、有事対策の面からも、許可取得後には日山協並びに外務省への計画書送付を心掛けて下さい。また、隊員変更など計画に変更が生じた場合にも、最新の計画書を再送する様、お願いします。(余力があれば日本ヒマラヤ協会へも計画書をご送付下さい。各方面からの照会に使用します。)

日本隊ヒマラヤ登山1997年

◎初登頂、初登攀 ○登頂 ×失敗

山 名	標高	派遣母体	隊 長 名	人数	ルート	結果	備 考
《ネパール》							
サガルマータ	8,848	ノエビア	辻田希代彦	10	南東稜	×	春
ローツェ	8,516	労山連盟	近藤和美	10	通 常	○	秋
ダウラギリ I	8,167	ガイア A C	小西浩文	2	北東稜	○	春
〃		J A C 青年部	松原尚之	7	ベアー	×	秋
マナスル	8,163	明治大学	三谷統一郎	8	通 常	○	秋 全員
〃		鈴鹿 A C	中村金夫	6	〃	×	秋
〃		ガイア A C	小西浩文	2	〃	×	秋
アンナプルナ I	8,091	明治大学	山本 篤	3	通 常		冬
プモ・リ	7,161	大阪労山	阿部明彦	3	北 面	×	秋
〃		労 山		1	北 面	×	秋
ガネッシュ・ヒマール II	7,110	東京岳人倶楽部	中村圭二	5	北 面	×	秋
ツクツェ・ピーク	6,920	戸隠同人	徳武和彦	9	通常	×	秋
アマダブラム	6,812	福岡山の会	関 剛	4	南西稜	○	秋
〃		ガイア A C	大久保由美子	1	南西稜	○	秋 公募隊
カンティ・ヒマール	6,450	大阪山の会	吉永定雄	4		×	春
チュルー南東峰	6,400		石井 清	2		×	秋
コンデ・リ	6,187	武蔵之國山岳会	渡辺 斉	2	南 稜	×	秋
イムジャ・ツェ	6,196	静岡労山	石井初男	1			春 死亡
ロブジェ・イースト	6,119	労山連盟	近藤和美	10		○	秋
《パキスタン》							
K 2	8,611	J A C 東海	田辺 治	9	西 壁	◎	夏
ナンガ・パルバット	8,126	チーム84	澤田 実	5	西 面	○	夏
〃		関西登高会	梶浦正教	8	西 面	○	夏
〃		墨田山の会	細田一郎	1	西 面	×	夏 パ合同
ガッシャーブルム I	8,068	群馬県山岳連盟	名塚秀二	7	北 面	○	夏
〃		群馬県山岳連盟	佐藤光由	6	北 面	×	夏
〃		岩峯登高会	木村功二郎	2	北 面	○	夏
〃		J F M A	常陸民雄	5	北 面	○	夏
〃		(ガイア A C)	小西浩文	2	北 面	○	夏 JFMA
ブロード・ピーク	8,051	静岡市山岳連盟	松永義夫	11	西 稜	×	夏 1名死亡
〃		群馬県山岳連盟	佐藤光由	6	西 稜	○	夏 全員
〃		群馬県山岳連盟	後藤文明	6	西 稜	○	夏
ガッシャーブルム II	8,035	群馬県山岳連盟	後藤文明	6	南西稜	○	夏
〃		群馬県山岳連盟	名塚秀二	7	南西稜	○	夏
〃		G 登攀クラブ	藤原拓夫	6	南西稜	○	夏
〃		スピダーニェ	坂原忠清	6	南西稜	×	夏
スキルブルム	7,360	神奈川ヒマラヤ	広島三朗	16	南 稜	○	夏 6名死亡

山 名	標高	派遣母体	隊 長 名	人数	ルート	結果	備 考
ディラン	7,257	豊橋山岳会	中山茂樹	5	南西壁	○	夏
プーパラシュ I	6,824	北九州カラコルム	成末洋介	3		×	夏
フンザ・ピーク	6,530	ウータンクラブ	宮地由文	7		×	夏
レディス・フィンガー	5,965		松岡清司	1		×	夏 死亡
《インド》							
サトパント	7,075	長崎県山岳連盟	下田泰義	9	北 稜	○	夏
チャルン	6,546	J A C 東海	鈴木常夫	10	南 稜	○	夏
ファワラ・ラング	6,349	ぶなの会	今井正史	7	南 稜	○	夏
チャウチャウ・カンニルダ	6,303	群馬県高体連	高橋守男	10	南西稜	○	夏
ストック・カンリ	6,153	神奈川県労山	香取 純	10	南 面	○	夏
〃		京都労山	花折敬司	10	南 面	○	夏
ドラウパディ・カ・ダンダ	5,716	労山連盟	近藤和美	10		◎	夏
シヴリン	6,453		宮崎元彦	2		×	秋
CB-13	6,264		イケオカヨシタカ			×	夏
ドダ	6,550		ヘンミサトル			○	夏
《中国》							
チョモランマ	8,848	亜細亜大学	野口 健	4	北 稜	×	春 公募隊
〃			続素美代	1	北 稜	×	春 公募隊
〃		F・O・S	戸高雅史	2	北 稜	×	秋
チャー・オユー	8,201	泉州山岳会	角谷道弘	4	西北西	○	秋
シシャパンマ	8,027	M・ゴリラ	安村 淳	8	北東稜	×	夏
〃		長野県山岳協会	清水 澄	3	北東稜	×	秋
ミニヤ・コンカ	7,556	札幌山岳会	芳賀正志	7	北西稜	○	春 日本初
〃		横断山脈研究会	須藤建志	4	北西稜	×	秋
ムスターグ・アタ	7,546	スキー de サミット	富岡一郎	7	西 稜	○	夏
〃		H A J	市川春代	6	西 稜	○	夏 女性隊
〃		芝浦工業大学	高原三平	6	西 稜	○	夏
〃			岩崎 洋	2	西 稜	○	夏
クーラ・カンリ II	7,418	H A J	山森欣一	7	北 面	×	春 蔵合同
ニンチン・カンサ	7,206	H A J	天城敏彦	13	西 面	○	夏
7,167m 峰（崑崙）	7,167	西陣山岳会		17		○	夏
ガウリ・シャンカール	7,134		山野井泰史	3	北東稜	×	秋
リズム	7,050	労山連盟	近藤和美	7	北東稜	◎	春
チョム・カンリ	7,048	中央大学	嶋津正道	7		○	春
ジェントンスンソン	6,246	長山協・東北信支部		8		○	春
ジャドワ	6,088	長山協・諏訪支部	野沢仁三郎	7			春
ギズ峰	6,079	長野県山岳協会	武田 武	16		○	夏
チュアジャジア II	5,890	新潟県山岳協会		8		○	夏

地域ニュース

《中国》

四川省デモで、70人余拘束

ニューヨークに本部を置く国際人権団体「中国人権」が12月7日、明らかにしたところによると、四川省自貢市で4日、失業者ら数千人が市当局の交通規制に反対して行った座りこみ抗議デモで、警察隊との衝突が発生し、70数人が拘束され、10数人が負傷したという。

座り込みの原因は、市政府が交通渋滞緩和などのため、今月8日から原動機付き三輪車や人力車などの市街地乗り入れを禁止すると発表したため。同市では失業者やレイオフされた人たちが三輪車を使って荷物を運ぶ仕事をしており、新たな規制でこの仕事も出来なくなり「生存権にかかわる」と抗議。座り込み人数は最多で5～6千人に及んだという。(12.8 東京新聞)

《インド》

インド国会が解散

インドのナラヤナン大統領は12月4日、グジュラル連立内閣の勧告を受けて国会（下院）を解散した。これにより、インドは昨年5月に任期満了に伴う総選挙が実施されてから、2年足らずで再び選挙戦に突入することになった。

総選挙の日程は明らかにされていないが、大統領は来年度の予算編成の期限となる来年3月15日までに新議会開催を求めている、2月末から3月始めに行われる見通し。インドは独立50周年を迎えたのを機に、クリントン大統領や橋本首相ら各国首脳を招待しており、外交筋は「政治的空白が続けば、外交日程にも影響が出かねない」と心配している。

インドでは前回の総選挙以来、3代の内閣が成立したが、それぞれ13日から約10ヶ月という短命に終わり、不安定な政局が続いていた。

(12.5 東京新聞)

3件の列車爆破で50人以上が死傷

インド南部のタミルナド州とケララ州の3ヶ所で12月6日早朝、列車が相次いで爆破された。インド南部鉄道管理局は、爆破で計8人が死亡、48人が重傷を負ったと発表した。PTI通信は、70人近い負傷者が出たと報じている。

この日は、1992年12月に北部ウッタルプラデシュ州のアヨドヤで起きたヒンズー教徒とイスラム教徒との大規模な衝突事件から5周年に当たる。

タミルナド州警察当局は、宗教過激派によるテロがあり得るとみて、州内各地の活動家ら約5千人を予防拘束して警戒を強めていた。

(12.7 東京新聞)

《パキスタン》

大統領辞任

パキスタンのレガリ大統領は12月2日夜、大統領官邸で記者会見し、辞任を発表した。次期大統領が選出されるまでは、ワシム・サジャド上院議長が暫定大統領を務める。司法侮辱罪を巡るナワズ・シャリフ首相と最高裁の対立に絡み、大統領が支持してきた最高裁にサジャド・アリ・シャー長官も同日、対立する判事らから解任されており、約2週間におよんだ対立は、シャリフ首相の勝利で終息に向かうことになった。

今年8月、シャー長官が最高裁判事の増員を要求したのに対し、シャリフ首相がこれを拒否した事を発端に政治危機が高まっていたが、軍部の圧力を受けた首相が10月に最高裁の要求をのんで一時決着した。最高裁はさらに、法案採決の際に討議拘束に反した投票を行うことを禁じた「党籍離脱法」を、「基本的人権の侵害である」との理由で停止し、首相が10月、この措置を「政治的駆け引きの横行につながる」と述べたのが司法侮辱罪に問われ、今回の事態につながった。

パキスタンでは、司法制度や裁判官への公の場での批判は犯罪行為と見なされ、最高で懲役6ヶ月を科せられる。

シャリフ首相は11月17日、パキスタン首相とし

ては史上初めて最高裁に出廷、無罪を主張した。

(12.3 読売新聞、東京新聞)

《カザフスタン》

カザフの首都移転

アルマトイを首都としてきた中央アジアのカザフスタンが12月10日から、北に約千2百キロの小都市アクモラに公式に遷都する。遷都にともなう式典はすでに先月行われており、10日はナザルバエフ大統領がアクモラで開催される政府、議会の合同会議で首都移転を正式に宣言。

(12.10 東京新聞)

インフォメーション

第19回インド・ヒマラヤ会議開催のお知らせ

日本ヒマラヤ協会主催のインド・ヒマラヤ会議が、下記の通りに開催される。

記

日 時 2月1日(日) 9時～17時

会 場 豊島区民センター

豊島区東池袋1-20-10 ☎ 03-3984-7601

参加費 3千円

- 内 容
1. 1997年インド・ヒマラヤ総括
 2. 許可取得から出発までの問題点
 3. 登山隊報告(予定)
ストック・カンリ(神奈川労山)
チャウチャウ・カンニルダ(群馬高体連)
ドラウパティ・カ・ダング(労山)
 4. 現地情報並びに質疑応答
 5. 事故対策と処理

問い合わせ・申込み

H A J事務局まで

第5回中国登山研究会開催のお知らせ

日本ヒマラヤ協会主催の中国登山研究会が、下記の通りに開催される。

記

日 時 2月8日(日) 9時～17時

会 場 豊島区民センター(同上)

参加費 3千円

内 容 1. 中国登山のあらまし

2. 登山隊報告(予定)

チョム・カンリ

ニンチン・カンサ(H A J)

ムスターグ・アタ(H A J)

クーラ・カンリⅡ(H A J)

3. その他

問い合わせ・申込み

H A J事務局まで

第36回海外登山研究会開催のお知らせ

日本山岳協会が毎年2月に開催している高峰登山に関する研究会である海外登山研究会が、下記の通りに開催される。

日 時 2月21日(土) 13時

～22日(日) 14時30分

会 場 東京八王子・大学セミナーハウス

☎ 0426-76-8511

参加費 1万2千円(宿泊費、22日朝昼食代、資料代を含む) 21日の夕食を含む懇談会費は別途3千円。なお、1日目14時～18時の講演と討論のみの参加も可。また、引き続き懇談会の参加も可。(3千円)

- 内 容
1. スイスのジャン・トロワイエ氏を迎えて高所順応、タクティクス、トレーニングなど「スーパー・ヒマラヤニストの秘密を探る」講演と討論
 2. ヒマラヤの爆風雪崩研究
 3. 登山隊報告(予定=K2西壁、ミニヤ・コンカ、リスム)
 4. 各国最新情報など

問い合わせ・申し込み

日本山岳協会

☎ 03-3481-2396 FAX 03-3481-2395

H A J 30周年記念式典・講演への中国からの招請は、中国登山協会副主席汪鉄銘氏に決定致しました。

トピックス

パール判事の顕彰碑京都に完成

極東国際軍事裁判（東京裁判）で、ただ一人日本の無罪を主張したインド代表の故ラダビノード・パール判事の顕彰碑が京都市東山区の京都霊山護国神社に完成、長男のプロサント・クマール・パールさん（71）夫妻をインドから招き11月20日に除幕式が行われた。長男夫妻は22日にはパール判事の遺品などを展示する神奈川県箱根町の「パール・下中記念館」を訪問、同判事と親交のあった日本人たちと友情を深めた。

顕彰碑は、瀬島龍三伊藤忠商事特別顧問ら政財界らの有志からなる「パール博士顕彰碑建設委員会」が、法人・団体約200、個人1,850人から約6,300万円を集めて建立した。

除幕式にはプロサントさん夫妻をはじめ、関係者約220人が出席。瀬島委員長は「パール博士は東京裁判で法の真理と歴史的真理に基づき（無罪）判決をした。世界の真の平和とアジア友好を教えてくれたその心を永遠に伝えたい」とあいさつ。プロサントさんは「父に示してくれた尊敬と名誉に感謝する」と答えた。パール判事の遺影が現れると夫妻はそっと両手を合わせた。

プロサントさんは今回で四度目の来日。22日には、旧友たち約40人と箱根へ。「パール・下中記念館」では、パール判事が東京裁判の時に使っていた遺品を懐かしそうに見て、父をしのんでいた。

（東京新聞 11月23日）

河口慧海の顕彰碑建立

仏教の経典を求めて鎖国下のチベットに潜入した仏教僧、河口慧海（1866～1945）の功績をたたえる顕彰碑が11月14日、慧海とゆかりの深いネパールの首都カトマンズに建立された。ネパールとの交流を深めようと、建立を計画した医師が夢半ばで他界した後、遺志を継いだ妻や知人らがネパール政府と交渉を続け、実現にこぎつけた。

顕彰碑を計画したのは、元兵庫教育大学の故住吉薫さん。登山家でもあった住吉さんは、1974年

にガンガブルナ峰（7,455m）登山隊に医師として同行、ネパール人の人柄やヒマラヤ山脈の美しさに心を打たれた。

以来、同国の要人が来日する度にホスト役を努めた。「慧海はネパール人の支援を受けた初めての日本人。両国の交流の始まりを後世に伝えたい」と顕彰碑建立を思い立ったという。

住吉さんは兵教大の同僚で彫刻家の辻弘教授（64）に、慧海のレリーフ像の製作を依頼。像が完成し設置場所を検討していた95年9月、70歳で急逝した。レリーフは慧海が日本を出発して百年目に当たる今年、建立する計画だった。

「夫の夢をかなえたい」と、住吉さんの妻美智子さん（69）が計画を継承、住吉さんの知人で宝塚ネパール協会事務局長の倉内司郎さん（56）ネパール政府との交渉を依頼した。

倉内さんは慧海が滞在したカトマンズのボードナート寺院が最もふさわしいと考えたが、同寺院は世界遺産に指定されており、交渉は難航。ネパール人の知人を通じて顕彰碑の意義を政府に繰り返し訴え、許可を得た。

顕彰碑は縦2m、幅1.3mで、慧海が泊まった宿坊に設ける。レリーフに加え、「ここに日本とネパールの友好が始まる」と日本語、ネパール語などで書かれた金属板の碑文がはめ込まれた。

除幕式には、遺志を継いだ三人の他、スーリア・バハドール・タパ首相ら約850人が参列した。

（東京新聞）

目指すは邦人初のイスラム法学者

イスラム教シーア派の聖地で、宗教教育の拠点でもあるコムの神学校で、日本人初のイスラム法学者を目指し、日夜勉強に励む男性がいる。

この人は東京出身の沢田達一さん（33）。沢田さんは、シーア派教徒で宗教家でもある父親の影響を受け、高校卒業後、「イスラムの道を究めよう」と、法学者になることを決意。アルバイトをしながら学費をため、就学ビザを得て、1989年にイランに渡った。

沢田さんが学ぶイマーム・ホメイニ神学校は、外国人の法学者養成のための施設で、欧米、アジ

ア、中東など世界各国から集まった約500人が研さんを積む。全寮制で、生活費と授業料は無料。

イスラム法学者とは、信者に対し、イスラム法(シャリーア)の正しい解釈を示す専門家を言う。学校ではイスラム法を中心に、イスラム哲学、神学、政治学、経済学、歴史学、コーランなどの授業が、一日4～5時間行われる。神学校での生活が6年目になる沢田さんは、「ペルシャ語やアラビア語の授業も気になりません」と語る。来春には全課程を終了する予定で、アヤトラに次ぐホジャトレスラムの称号が与えられる。

日本に一時帰国した時、イラン大使館で、結婚や戒律についての相談を受ける仕事を手伝い、沢山のイラン人男性と日本人女性のカップルが悩みを抱いていることを知った。「日本にも、信者の悩みを解決する法学者が必要だ」と痛感した沢田さんは、帰国後、そうした人々に相談所を兼ねたイスラム研究所を開設する計画だ。

(12月9日 読売新聞夕刊)

30周年資金協力者ご芳名

10口(松館正義、八木原暁明3回目) 5口(尾形好雄2回目) 3.7口(小林英見) 3口(花崎洋、田村俊介、大内倫文) 1口(中島信行、山岸和男、千葉真嗣、須田利昭、江尻健二、桑川章、戸谷薫、松島静吾2回目、高橋亨夫、西川修、相楽利夫、長谷川昭一、睦好正治。匿名1) 0.2口(青木正樹) 総計204名4,686,000円(1997.12.12現在)

東京集会のお知らせ

日 時 1月27日(火) 午後7時～
新年会は変則的ですが、30周年記念とのかねあいで、曜日が異なります。
場 所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌 '岳人'



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年

- ★ 1月号
- 2月号
- ★ 3月号
- 4月号
- ★ 5月号
- 6月号
- ★ 7月号
- 8月号
- 9月号
- ★ 10月号
- 11月号
- 12月号

特 集

ぼくの好きな雪の山小屋で
粉雪わけて爽快山スキー
駅から登るとっておきの山
新緑と残雪を求めて5月の山
山の本、名作をめぐる春山紀行
高層湿原、もう一つの尾瀬へ
夏は北海道の花と溪流へ
真夏に涼を求めて、高原へ
初秋の単独行の山歩き
上信越の紅葉をさぐる
名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞)

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

■ 寸 感 ■

1997年も終わろうとしている。お寺さんの今年の漢字は「倒」となったらしい。わたしが実感するのは「暖」である。何んと暖かい年だったのだろうか。

経済の変化が「山岳」の世界に及ぶには2～3年かかることを考えれば、やがて21世紀初頭には山岳の世界にも幾つもの「倒」現象が起きてくるのかも知れない。

来年は虎年。山の世界も明るく、元気な年になってもらいたいものである。(1997.12.15 山森)

事務局日記 (12月)

- 1日(月) インド・ヒマラヤ会議、中国登山研究会会場申し込み(豊島区民センター、寺沢)
- 3日(水) 30周年記念行事案内状発送
- 8日(月) チベット登山協会代表団夕食会(於、ナバホ、JACと共催。遠藤、山森、八木原、尾形、酒井、寺沢、中岡)

- 9日(火) ヒマラヤ314号発送
- 10日(水) CMA趙建軍副部長と懇談(ルーム)
- 11日(木) 永田岳人編集長来会、インタビュー
CMA李豪傑氏よりTELあり、30周年来日の件
- 17日(水) 労山忘年会(於、エミール、山森、尾形、寺沢)
- 22日(月) 東京集会(名)
- 26日(金) 事務所御用納め
仕事始めは1月6日

ヒマラヤ No.315 (2月号)

平成10年1月10日印刷 10年2月1日発行
 発行人 稲田 定重
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
 TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510
 (隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株 式 会 社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004